

袋高通信

あいのだより

'19 7月号

7月23日発行

通巻第173号

静岡県立袋井高等学校

新しい時代へ

PTA会長 稲垣 敏光

令和元年度、静岡県立袋井高等学校 PTA会長を務めさせていただく事となりました、稲垣敏光と申します。

私は、袋井高校の卒業生ではありませんが、高校時代は学校も程々に部活動、文化祭、体育祭などにいそいそ毎日でした。卒業後三十年を過ぎ、平成から令和へと新しい時代の最初の年にまさかこのような形で、高校と関わりを持たせていただけるとは夢にも思いませんでしたが、病気を患っている息子がお世話になつている経緯もあり、力不足ではございますが、会長を引き受けさせていただきますました。

また、PTA会員の皆様には、日ごろから多大なる御理解と御協力をいただいておりますこと、また先生方には様々な子供たちの御指導はもちろんのこと、PTA活動の活性化のためにも積極的に取り組んでいただいておりますこと、厚くお礼申し上げます。

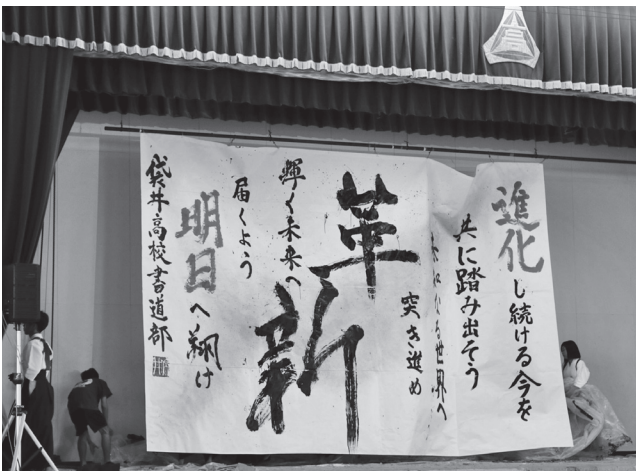
新年度のスタートとともに、新しい年



号が発表され、緑風祭の興奮冷めやらぬなか三年生は受験生へ、下級生は新しいリーダーへと袋井高校も次へとスタートしているところです。

子どもたちの努力がこの地域の誇りとしていますが隣接する公立高校の統合、来年度から私立高校の一部無償化、大学入試制度改革など学校と子どもたちを取り巻く環境の変化にも流されぬよう、保護者の皆様には、体育大会、マラソン大会、部活動など子どもたちと触れ合い、袋井高校生らしさを感じ、盛り立ててい

けるように御協力お願い申し上げます。
最後になりましたが、PTA活動は先生・職員方、保護者同士との関わりの中で、親としても学ぶことが多いと思います。ぜひ多くの保護者の皆さんがPTA活動に参加していただきますようよろしく願います。



一年だより

主体的に動くこと

高校生活への「慣れ」が気持ちの緩みに繋がっている場面も見られましたが、全体的には落ち着いたスタートが切れたように感じています。

六月から始めた「Classi」で、日々の学習時間の把握をしています。平日二時間以上の家庭学習が目標ですが、達成率は二〇%程度であり、受験を目指す高校生としては物足りない現状があります。時間にゆとりのある夏休み中に家庭学習の習慣を身につけ、二学期以降の改善を期待しています。

来年度から始まる新入試に向けて様々な情報が発信されていますが、未確定な部分も多いため不安を抱えている生徒も多いかと思えます。現段階の情報を集約したうえで、一年生が今すべきことを何か。二点考えました。①『確かな学力を身につける』これは昔も今も変わりません。目の前の授業や課題に一生懸命取り組み、基礎学力の定着を図ることが大切です。新傾向の問題への対応も求められますが、受験期において高

い応用力を発揮するためにも、一年次の基礎固めに意欲的に取り組んでほしいものです。②『自らに付加価値をつける』推薦入試やAO入試の拡大、学力以外の観点の評価等、今まで以上に活動重視・人間性重視の受験形態が増加します。そのときに自信をもって何を語れるでしょうか。少し前までは「部活動を頑張っていました」と言えば、それだけで大きな付加価値でした。しかし今は、勉強と部活動さえやっていれば大丈夫という時代ではなくなりました。例えば地域の活動やボランティア活動、外部検定試験など、自らが目的をもって主体的に動いてきた人材を大学側は求めています。受験が近くなると動きにくくなりますので、時間があるこの一年生の夏休み、自らの付加価値を高めるような活動に取り組んでほしいと考えています。

一年学年主任 鈴木彰洋

二年だより

進路実現のために今すべきこと

学習・進路支援システムClassiの活用を開始し、三か月が過ぎました。生徒の皆さんは、我々大人が思うよりも順調に、毎日の学習時間を記録しています。今後は進路希望や行事・学習のふりかえりなどのポータルフォリオ機能を使用できるようにしていく予定です。

さて、本年度から学習時間調査はClassiのデータをもとに行っておりますが、学習時間の平均は「平日二〇分、休日一八〇分」の目標を超えていません。昨年度は平日で一五〇分を超えていたことを考えると、危機的な状況です。ここで入学時に立ち返って、どのように一日の過ごし方をコーディネートすべきか、考え直していただきたいと思えます。学習時間のある程度確保しなければ、十分な学力は身につけません。長い時間集中して学習する気力と体力がなければ、受験勉強を始めることすらできません。本格的に受験勉強の始まる一年後。急に、平日五時間、休日十時間の学習をこなすこと

ができるでしょうか。今のうちに素地を作っておかなければ間に合いません。

また、本校の卒業生に毎年行っているアンケートでは、受験勉強を始めるのは「二年生の三学期」が理想的だという答えが多いのです。もちろん、部活動がありますから、時間の確保というより内容の充実という意味です。半年後、そのようなスタートをするために、「いま」の学習時間確保は不可欠なのです。

学習・進路支援システム、進路のしおり、進路に関わる説明会等への参加など、生徒の皆さんが将来を考えるための材料や機会は用意されています。二学期からは、大学から取り寄せた資料などをもとに、大学・学部・学科の比較をし、年度末に仕上げる「第一志望届」へ向けた下地作りをします。だれのことでもない、自分自身のことなのだという意識をもって取り組むことができるよう、指導してまいりたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

二年学年主任 大石真理

三年だより

できること

先日学年集会で「できること」を具体的に考えて実行しよう、という内容の話をしました。目標を設定し、計画をたてコツコツ努力を続ける。言うのは簡単ですがこれはなかなか大変なことです。

そこで、大切なのは目標を実現可能、継続可能なものにするということだと思います。

では、この夏休み三年生にとって「できること」には何があるか考えてみましょう。

夏休みの勉強計画もただ十時間勉強する、ではダメです。偏差値をアップさせる、もっとダメです。

これをやればこのような成果がある。確実に成果が上がる勉強法は何なのか？これを先に考えてしまつと前に進みません。

大切なのは具体性。英語はこのテキストを徹底的にやる。世界史はこの問題集を完璧にする。まずは「できること」「をやってみてはじめてみよう。」

時間の決め方も「何時間やる」よ

りも「朝九時からこれをやる」といった決めの方がよいと思います。時間も具体的にあればあるほどよいです。

次に環境。毎日家で決まった時間に起き、自分の部屋で受験勉強に取り組む。自分にとって慣れた誘惑の多い環境で強い意志を持てるのか、「できること」ではないと判断したならば、学校に通うという選択をしてみます。学校に行けば同じような同級生が真剣に勉強に取り組んでいる、そのような環境に自分を置き、勉強せざるを得ない環境を作ってみるのです。

現段階で目標が定まり前に突き進んでいる人はそのまま突っ走ってください。

そうでない人！まだ間に合います。高い目標だけを考えてしまうから何をしたいのかわからなくなるのです。目標を落とししてみましょう。誰にでもできることを愚直に謙虚に積み重ねる、その成果は確実に実を結びます。

二年学年主任 加藤久仁寿



一学期の取り組みより

進路課

進路室の前に、各大学のパンフレットが展示してあります。通りすがりに友人同士で手に取っていたり、放課後学習室でじっくり見たり、毎日数十も届く受験情報の中から生徒のニーズに合ったデータを的確に届けることを心がけています。

進路課の一学期の主な取り組みは次の二点です。

まず今年の特講が実施されず、毎週月曜日にLHRが一時間設定されています。その結果、進路学習の機会も増え、三年生では昨年度までは放課後などに実施していた奨学金の説明を聞いたり、志望校を考えたりする時間が十分とれました。また、今後二年生で来年度入試について考えたり、一年生で卒業生から話を聞く機会を設けたりとLHRにおける進路学習の拡充を図っています。低学年から進路について考える機会を増やすことが進路意識の向上につながるよつ計画していきたいと思えます。

次に、現二年生からの大学入試に導入される英語四技能検定につい

て、本校生徒がどのように受検していくのが最善かを検討しました。最終的にはまだ決定いたしてありませんが、決まり次第お知らせいたします。検定を実施する各団体からの情報は、進路室だよりを通して今後もお知らせしていきます。

大学入試制度の変わり目にあたり、どの学年のお子様にも保護者の方にもなるべく不安がないよう、情報の収集と提供に努めて参ります。御質問などがありましたら、担任を通してお気軽にお寄せください。

(課長 大村生実)



一学期をふり帰って 生徒課

一学期が終わり、長期の夏季休業に入ります。一学期を振り返ってみて、どういう学期になったでしょうか。勉強に部活動に学校行事に精一杯努力できたでしょうか。

年度当初、学校長から年度目標が話されました。生徒課としては(一)部活動、特別活動へのきめ細かな支援により、生徒の主体性、自立心の涵養を目指す。(二)きれいな教室・廊下、美しい身なり、気持ちの良い挨拶・言葉遣い、大きな声での校歌斉唱を目指す。おもに以上の二項目です。その中でも、今年度重点に置いているものは以下の三点です。

挨拶…明るい挨拶を行う。
言葉遣い…場に応じた丁寧な言葉を使う。

礼儀・マナー…規範意識を身に着ける。
(大人、社会人として必要な生活習慣)

当たり前のことですが、今後の社会で活躍する人材となるために身につけていく習慣です。一年間を通じて自己を磨いてもらいたいです。

さて、一学期には学校行事の柱ともいえる「緑風祭」が行われました。「おもてなしの心」は、文化祭における本校の伝統的な精神です。今年度は「革新」をテーマに、生徒会執

行部を中心に生徒各自がそれぞれの立場で新しい企画や展示内容を考え、積極的に参加し充実した時間を共有できたのではないかと思います。三年生は、毎年この「緑風祭」を境に、受験モードに突入していきます。その様子を下級生もよく見ておいてもらいたいと思います。

また頭髪・服装に関しては、ほとんどの生徒は大きな問題もなく、袋井高生としての品位を保っていると思います。二学期もこの状態を保って欲しいと思います。一方、携帯電話をしながらの運転やウォークマンを聞きながらの運転といった違反行為も見られるなど、交通安全マナーの改善がなされていないことは本校の大きな課題となっています。近隣の住民の方から自転車の通行に関する苦情がありますし、警察から、自転車は「車」と同じなので、車道(左側の隅を通行し、許可をされた歩道以外は通行しないように注意)があります。御家庭においても「命の大切さ」の観点から、交通安全教育を行っていただきたいと思っています。まだまだ、校外での生活には不安はあるものの、学校における学習や部活動また生徒会活動では生徒たちに健全性を感じます。しかし現状に満足せず、袋井高校生としてのプライドをもって生活してもらいたいと思います。

終業式には、「夏季休業中の諸注

意」が配布されますので、よく読んで長期にわたる生活を充実した期間にしてください。

(生徒課長 澤木 徹)

「継続は力なり」 教務課

平成の時代が終わり、令和の時代となりましたが、平成での日本人のノーベル賞受賞者は何人ぐらいたと思いますか？何と二十人も受賞しています。昭和では七人ですから、近年の多さがわかると思います。同じ日本人としてとても誇りに思います。

日本人として初のノーベル賞受賞者は、昭和二十四年に物理学賞を受賞した湯川秀樹博士です。受賞理由は核力の理論的研究に基づく中間子の予言に対してでした。湯川博士は著書『自己発見』の中で自らの考察のあり方を述べています。「今日はあれをやり、明日はこれ、というように、あまり気が散ると、結局どれもものにならないですね。同じことを、根気よくあてもない、こうでもない、とひねくりまわしているうちに、ハッと気がつく。これは学問に限らず、どの方面についてもいえることだろうと思います。」自ら課した一つの問題にこだわり、たとえ苦しくて諦めずに根気強く考える。同じことでも見方をあれこれ変

える。そうすれば、解決方法が浮かんでくるということなのです。実際に「核力の本質は何か」という問題の解決に昭和七年から二年間を費やしたと言います。就寝時にも枕元にノートとペンを置き、真夜中でも頭に浮かんだアイデアがあると電灯をつけてノートに書き込んだそうです。著書『旅人』の中で、この時期を「最も苦しい二年間」であり、「重い荷を背負った旅人が、上り坂にさしかかった」ようだったと振り返っています。その苦闘の果てに、「ハッと気がつく」瞬間が訪れ、中間子の存在を予言できたのです。

何かを成し遂げるためには、こだわりをもって課題に取り組み、そして壁に当たっても目標を見失わず、強靱な精神力で粘り強く努力し続けるしかありません。同じようなことを繰り返すことはバカらしいと思うことがあるでしょう。しかし、そのバカらしさから偉大なものが生まれるのです。勉強や部活動でもこだわりをもって、努力を継続してほしいと思います。『継続は力なり』です。

(教務課長 長谷川明彦)

